いわむら一斎塾報

発　行
NPO法人いわむら一斎塾
事務局　江戸城下町の館
〒509-7403
岐阜県恵那市岩村町317
ＴＥＬ　0573-43-5087

学は一なり。而も等に三有り。初めには文を学び、次には行を学び、終りには心を学ぶ。然るに初めの文を学ばんと欲する、既に吾が心に在れば、則ち終りの心を学ぶは、乃ち是れ学の熟せるなり。三有りて而も三無し。

（言志耋録一条）

釈　意

学問する道は一つである。しかし道には三つの段階がある。初めに古人の文章（諸経）を学び、次に古人の行為行動を歴史に学び、終りに古人の精神を学ぶのである。しかるに古人の文章を学び修める思いがあるなら、それは最後に古人の精神を学び活かすことであり自らの学びが円熟している現れでもある。学問には三つの段階があるとするが、実のところ段階的順番があるのではなく、一貫したものであるのだ。

読書して学びよしとせず、著者や登場人物の行為実践を行間より読みとり、その思いや精神、思想までも感得することが大切。故に「文・行・心」は一貫して修得するもの。

（徳増省允）

『言志四録』は世の荒波を越えて行くガイドブックだ

作家　神渡　良平

若い人は「いかにして世の中に出るか」と、常々考えている。一流ブランド大学に行きたいと思うのも、率直に言えば、世の中に一廉の人物として迎えられたいからである。

世の中の人はその人がまだ海のものとも山のものともわからないから、判断する根拠が欲しくて、たとえば学歴などを参考にする。

では、世の中の評価が定まる前の宙ぶらりんのとき、自分はどうしたらいいのかということになる。

私は、自分に対する世の中の評価が定まる前の不安定なときこそ、自分で自分を高く評価し、百年に一人出るか出ないかの逸材だと太鼓判を押すことができなければいけないと強く思う。自分が自分を絶対的に評価して、自信を持つ。いわば思い込みが激しくなければならないと思う。

中国の古典は自分をどう処したらいいかという人間学の宝庫だが、その中に、趙の大臣・平原君が自分の家に居候していた食客の毛遂にこう言ったと書かれている。

「士の世に処るは、錐の嚢中に処るがごとし」（無名の優れた人物とは袋の中の錐のようなもので、いずれ穂先が袋から突き出て評価されるように、必ず評価される時が来る）

平原君が爪楊枝を口にくわえて、そううそぶいている様子が目に見えるようで、大変な自信家だったようだ。

でもこれは強がりでもなんでもなく、世の中を渡るための秘訣だ。

世の中がまだ評価してくれていないからこそ、自分が評価して自信を持つのだ。

こういう浩然の気を持つことが世渡りの秘訣だということは、佐藤一斎の不朽の名著『言志四録』にも散見される。たとえば次の一条はどうだろうか。

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うるなかれ。ただ一燈を頼め。」

（『言志晩録』十三条）

顔を撫でられてもわからないような漆黒の闇夜を行くとき、ああでもない、こうでもないといろいろ理屈を並べたてても意味がない。

最後の頼みは自分が提げている提灯だ。自分を信頼して、暗夜を行こうではないかというのだ。

ここにも自分に対する絶対的信頼がある。これがあれば必ず道は開ける。そしてこういう自分を得るためにも、人は独り黙って座ることが大切だ。絶対の世界に対峙し、悠久なる世界に遊ぶと、次第に肚ができてきて、世の荒波を越えていける力が備わる。『言志録』はそういう自分をつくっていくガイドブックでもある。

三学戒の碑（神渡先生の揮毫）

「言志祭」における神渡先生の講演会

佐藤一斎の家庭教育について

いわむら一斎塾
理事　西尾　彰芳

最近の世相について、あまりにも目を覆う惨状が日本のあちらこちらで生じています。近くに目を転ずれば、昨年、中津川市の高校生殺人事件、瑞浪市の中学校でのいじめによる自殺、今年にはいり一月から信じられないような事件が日本全国でおきています。

この状況について様々な観点から政治家、教育者、評論家、社会学者等々の原因を究明する発言があいついでいます。専門家の研究に委ねる事も大切ですが、危急にまず家族のあり方を考える必要があるのではないかと思います。一連の事件についてその家族等の周囲の人達（友達、学校の教師等）は必ず何らかのサインを感じていたはずです。このサインをどうして生かすことができなかったか悔やまれます。責任問題の追求も大切ですが。

ここで、これらの問題が生じた大きな原因の一つであると考えられる家庭の在り方について「佐藤一斎」の「言志四録」から主なものを抽出して、家庭、父母、子供の教育について考えてみたいと思います。

まず第一に、

父母のあり方について

父の道は当に厳中に慈を存すべし。
母の道は当に慈中に厳を存すべし。
（言志晩録　二二九条）

父たるの道は、厳格のうちに慈愛がなければならない。母たるの道は、慈愛のうちに厳格さがなければならない。

子の教育について

子を教うるには、愛に溺れて以て縦を致すことなかれ。
善を責めて以て恩をそこなうことなかれ。
（言志後録　一五九条）

子どもを教えるには、愛に溺れて、わがまま気ままにさせてはいけない。また、善行を強いて、子どもを責め立て、（親子の間の和気を損じ）親の恩を仇にさせてはいけない。

孫は子より可愛い（家族）

親の道は慈にあり。人おおむね子に厳にして、孫に慈す。何ぞや。けだし其の子に厳なるは、責善の切なるを以て然り。すなわち慈なり。其の孫に慈するは、其の我れに代わり以て善を責むる者あるを以て、故に只だ其の慈を見るのみ。祖先の子孫に於けるも、其の情けだし亦相違いにしからんか。
（言志耋録　三三三条）

親の子に対する道は慈愛である。しかるに、人は大抵子には厳しく、孫に慈愛深いのは何故だろうか。思うにその子に厳しいのは善行を勧める心が痛切なためである。このことはやはり子にたいする慈愛なのである。

その孫に慈愛深いのは、自分に代わって善を責める者がいるからで、ただ慈愛だけを見せることになる。

祖先の子孫に対する情も、こういう具合に、お互いに子には厳、孫には慈と、互い違いに伝わってきたのではなかろうか。

様々な観点から、日本人の道徳観が薄れてきています。ここでは家庭教育のみに視点をおきましたが、最近の小中学校での給食費の未納問題にふれ、ある著名な評論家が「日本の国は、そこまで崩れてしまったのか。」と嘆く発言をしてみえました。もう一度原点に立ち返り、人としてのあり方、家庭のあり方等を考える時期ではないかと思います。

県読書感想文小学校高学年の部
優秀賞授賞

『佐藤一斎さんからの伝言』

駄知小六年　塚本　怜子

私の十二歳の誕生日プレゼントにと、祖父から絵本をもらいました。それがこの本です。さし絵がかわいいと思いながら、パラパラめくってみると、「あんじゃない」という言葉が目にとまりました。

それは、祖父が時々私たちに言ってくれる言葉だったのです。「大丈夫だよ。気にするな。」という意味だと教えてもらいました。私は使いませんが、昔からある東濃弁だそうです。私は絵本に東濃の方言が出てきてびっくりしました。そしてすぐに、最初のページから読んでみることにしました。

この本は、佐藤一斎という人の教えが書かれた『言志四録』の内容を分かりやすくした絵本です。「あんじゃない」の言葉の下には、「青天白日は常に我にあり」とありました。一斎さんの教えです。難しい文だな、と思いましたが、一斎さんが江戸時代の人だとわかり納得しました。そこには「気分がそう快でいられるというのは、自分の心のありよう、気持ちのもち方、自分の努力と修養の中から生まれるものであり、外から与えられるものではありません。」と

いう説明がそえられていました。ちょうどその時、苦手なことから逃げていた自分があって、少し落ち込んでいた私の心に、その言葉がすっと入り込んできました。そして、周りのせいにしていた自分にも気付くことができました。

一ページに一つずつの一斎さんの教えを読み進めるうちに、背すじがのびてきて、勇気や自信がわいてくるような気がしました。

父もこの本を読んだのですが、「この教えが一番好きだな。」と、本も見ずに選んだものがありました。それは「少にして学べば、則ち壮にしてなすこと有り。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」というものです。私は意味を知りたくて、もう一度説明を読んでみました。そして、今学校で勉強していることは、大人になった時に役立つ。失敗もすべて無駄にはならないのだということを知りました。父の好きなこの言葉は私も好きになりました。

東濃弁がでてきたのは、一斎さんがとなりの市の恵那市岩村町の人だったからだと分かりました。私はこんな近くに偉大な人がいたことに驚きました。

そこで夏休みのある日、家族で一斎さんの岩村町を訪ねてみました。古い美しい町並みの、ほとんどの家の玄関に、厚い木の板に筆で文がかかれているものがかけられていることに気がつきました。そのすべてが本にあった一斎さんの教えだったのです。岩村の人々が、どんなにほこりに思い敬っているかわかりました。そして、「わが家だったら、何という教えを飾ろうかな。」と考えたら楽しくなってきました。

私はこれから中学、高校へと進みますが、学ぶことをわすれず、迷ったり落ち込んだりしたら、この本に力をもらいたいと思います。

今・求められる女子の教養教育

徳　増　省　允

平成十九年三月七日、ＮＰＯ法人いわむら一斎塾は、堀井理事長、鈴木副理事長が恵那市役所に可知市長を訪ね、同市岩村町出身で明治、大正、昭和初期にかけて日本の女子教育の先駆者として活躍、実践女子学園の創設者であり優れた歌人でもあった下田歌子氏の著書「女子の修養」の現代語訳本、八千部を贈り、子どものいる市内の家庭、公共施設等に配布することとなった。又、他に七千部を広く東濃、県内及び全国の希望者に有料で販売。

今、女性の使命（天命）としての女子の教養が求められ、子育て中の母親、これから成人してやがて子育て体験する若い女性の基本的な心のあり様、精神を教える誠に良き指導書であり、修養書である。その基本の真理は、時代がかわれどもかわるものではない。

戦後、衣食住が大変に不足した状況下で、今から六十年前、全国民は新しき日本の興国のため本格的に第一歩をふみだした。

昭和二十二年（一九四七）三月に民主主義の新憲法下で、教育基本法、学校教育法が公布され、六十年後を前に、昨年十一月から十二月にかけ論議となり改定されたが、その改定内容には未だ賛否両論がある。しかし法がかわっても人の心が改められなければ、何もかわり改められることはない。

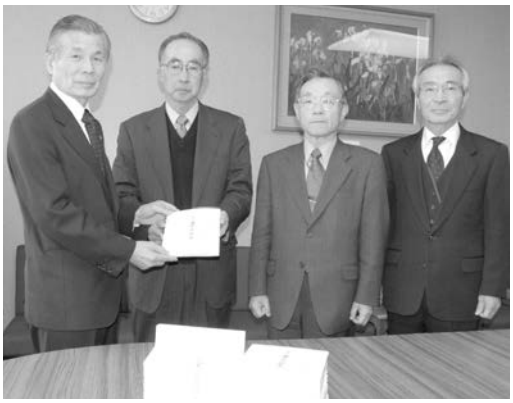
今の世を構成する大人、子育てにある親、学校にかかわる先生及びＰＴＡ、教育関係の行政にかかわる人たち、全てが素直な心で懺悔反省し、国の将来の為に、それぞれの分野と分限に応じて真に目覚めるときで、まさに待ったなしの現状にある。

著名なアインシュタインが大正十一年来日、長期滞在し、日本に残した言葉がある。

「…最後の戦いに疲れた時、人類は真の平和を求め、その盟主なるものは、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を越えた、最も古く、最も尊い家柄でなくてはならぬ。世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。われわれは神に感謝する。われわれに日本という尊い国をつくっておいてくれたことを」と。

母なる大地、母なる海、人は男女ともに母―女子のもとに生を受け、その慈愛のもとに育つ。「三ツ子の魂百まで」。女子の教養教育は、その根幹をなす。

「尊い国」、「美しい心の人がすむ国」たることを誇りとして、自信をもって一人びとりが使命に生きるために真に学び自らに問うことだ。



恵那市への贈呈式

「歴史的風土百選」に城下町岩村の街並み

山口通子

岩村町の街並みが「美しい日本の歴史的風土百選」に選ばれました。毎日この町で生活していても内からはなかなか良さに気づく事が少なく、他から認めて頂き改めて見つめ直すきっかけを頂いた様な思いがします。

「日本有数の山城と商家町の歴史的な街並みが調和している点などが評価された」という事です。

街並みを通る時も車で「あっ」という間に走り過ぎてしまう事の方が多い日々ですが、改めて「我が町」を見つめ直すという思いで新町から上町までをゆっくりと歩いて各家庭のウインドーに飾られたお雛様を観賞したり、本通りから正面に見える城山に目を向けて心を落ちつかせることができたらと思います。今の人々が超多忙な生活で振り回わされているからこそ、この岩村の街並みが多くの皆様に癒しを与えてきたのではと思うのです。他市町の方達から「良い所にお住まいですね。」と言われた時「とっても良い所です。心温かい人達が大勢住む町です。ぜひまたお出掛け下さい。」と声を大にして言葉にできる町民のひとりとなることができたらと思うものです。

「いわむら一斎塾」がめざすもの

二十一世紀を生き抜く教養豊かな人材と指導者を養成するために、郷土が生んだ幕末の偉大な碩学佐藤一斎翁の教えを基本理念として、広く高い見地から多様な学習と修養の場作りに関する事業を行い、子どもから大人まで幅広い層に至るまでの「人づくり」「心そだて」及びそれを活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的としています。

目的達成の取り組み

(1) 佐藤一斎の教え（「言志四録」）を学ぶ定例学習会の開催
(2) 郷土の先人や歴史に関する公開講座及びワークショップの開催
(3) 各種団体等からの要請による郷土の先人に関する講師の派遣
(4) 郷土の先人に関する情報誌・書籍の発行
(5) 郷土の歴史や先人に関する書籍・論文・資料の収集
(6) 郷土の先人の知恵を今に活かすイベント・フォーラム等の開催及び協力
(7) 郷土の先人から学ぶ関係団体との研修会及び交流会の開催

事業計画

「郷土の先人『佐藤一斎、下田歌子、三好学など』の業績や教えを学び、思いやりと譲り合いの心でまちづくりに貢献できる人が一人でも多く輩出して欲しい」との願いから、本年も次のような事業を実施します。

・平成十九年度総会
　四月十四日(土)午後
・第十一回言志祭
　十月二十七日(土)午前～
　（顕彰会主催に協力）

なお、

「先人に学ぶ」(仮称)フォーラム
　七月二十八日(土)東京
　（東海市主催）
「全国藩校サミット」
　六月二十三日(土)鶴岡市

以上は有志で参加予定。

・「言志四録」講読会
　毎月第二土曜日夜
・特別講座「いわむら一斎塾」
　五月から一月にかけて七回ほど実施予定。詳細は決定次第ご連絡します。
・佐藤一斎ゆかりの地を訪ねて
　十一月頃実施予定。
　希望地があればご連絡ください。
・佐藤一斎、言志四録等について講演、資料収集、他団体との交流会など、随時行います。
　会員を増やし、お互いの志を高めて行きたいものです。

一斎塾が取扱っている本のご紹介

・名言録集　五百円
・おじいちゃんとぼく　千五十円
・言志四録抄日捲り　七百円
・大人の寺子屋　六百円
・重職心得箇条　八百円
・生き方ルネッサンス
　―佐藤一斎の思想　二千六十円
・佐藤一斎　三百円
・女子の修養　七百円

あとがき

塾報第二号をお届けします。

ご多忙のなか玉稿をお寄せいただいた神渡先生を始め、紙面を飾っていただいた会員の方々のご協力に感謝申し上げます。

また、読書感想文で見事優秀賞に輝いた塚本さん。子どもらしい素直な気持ちで表現されていて、皆様にもぜひご一読願えたらと思い、ご本人の許可を得て掲載させていただきました。

第三号は十月発行の予定です。

（木村・杉浦・鈴木・成瀬・山口・徳増）